＜公民館・集会所の活性化のためのライブ・カメラ利用の検討報告＞

■　プロジェクト名：　公民館・集会所の活性化のためのライブ・カメラ利用の検討プロジェクト

■　プロジェクト・メンバー：黒沼正良、富樫時子、堀清人、山口浩二、本間俊光（リーダー）

■　目的

地域活動の再構築の拠点としての公民館や集会所に高速回線につながったライブ・カメラを設置することで、地域住民に対する生涯学習支援、官・公・民サービス、地域情報発信を支援するための検討を行う。特に、中山間地における情報化社会のデジタル・デバイドの克服や生活の質の向上のためのモデル地区を想定し、光ファイバ通信設備などの整った施設と公民館や集会所を無線ＬＡＮでつないで、公民館や集会所にコンピュータとライブ・カメラを設置することで可能になる有効なサービスについての検討を行う。

■　利用環境についての検討

+ 公民館、学校など、公共サービスを目的とする施設にはＶＬＡＮなどのネットワーク基盤が整備されつつある。
+ 現状では、主に業務連絡などでイントラネットとして利用されているが、今後は、市民への公共サービスを提供する情報インフラとして活用されることが期待される。
+ 特に、公開講座、講演会、会議、ネット上での市民相談、遠隔医療など、ブロードバンド接続による映像を利用する機会は、今後急速に増大していくことが予想される。
+ 公民館におけるブロードバンド接続による映像を利用した公共サービスの充実は、地域コミュニティの拠点化、デジタル・デバイドの解消という社会的な面、及び既存の設備やネットワーク資源の活用という面の両面から、その利用環境の整備が強く望まれる。

■　通信環境の整備計画についての検討

+ 民間会社によるブロードバンド接続を利用する通信環境は、市街地など、採算が見合う地域については急速に進展している。
+ 一方、中山間地や散在する小集落などでは、採算性の面から民間ベースでの通信環境の進展が余り見込めないため、デジタル・デバイドが更に拡がっていく傾向にある。
+ 今回、現状ＩＳＤＮの通信環境しかない或る中山間地域をモデルに、そこへ民間通信会社によるブロードバンド接続を実現する費用を見積もってみると、市街地の住民が接続するための費用を大幅に上回ることがわかった。
+ 最近、携帯電話による高速接続が可能になってきて、上の状況の改善に資することが期待されるが、その携帯会社のネットに閉じたサービスに限定されといった状況もあり、どれだけ活用できるかは今後の検討が必要になる。
+ このような格差による差別を減らしていく方策の一つとして、それらの被差別地域にある公共施設を通信インフラの拠点とすることが考えられる。
+ 現在イントラネットとして業務用に使われているＶＬＡＮの場合、それを公共サービスの分野にも活用することは技術的に可能である。その際、特に業務用の通信の秘匿性を如何に保証するかということが重要な課題としてあり、それを実現する方法を費用対効果の面も考慮しながら、パイロット・スタディを実施し実証しながら選択していくことが必要になる。

■　映像通信の活用計画についての検討

+ 映像通信の活用方法を送受信者の数で、①一対多（講演など）、②多対多（会議など）、③一対一（市民相談、遠隔医療相談など）と分けてみることができる。
+ それぞれの場合における映像の画質・音質への要求、それに伴う通信帯域への要求、それを実現する通信回線及びコンピュータへの要求が仕様として必要になる。
+ ブロードバンド接続による通信では映像が大きな役割を果たすが、地区民によるホーム・ページ（地区紹介、地区アーカイブ）や、公民館情報、ＮＰＯ情報など、様々な情報サービスをも伴うことによって相乗効果が期待できる。

■　展望

+ モデル地区とモデル事業を設定し、パイロット・スタディを実施する。モデル地区としては、課題への知見が得られやすい環境にある公民館や集会所。モデル事業としては、講演、会議、市民相談などの活用方法のなかから、費用対効果及び発展性が見込まれるものについて優先順位をつけて選択。その上で、モデル地区におけるモデル事業をパイロット・スタディとして小規模に実施するなかで、本事業への展望を開くことが期待される。

報告者：本間　俊光（プロジェクト・リーダー）　報告日：2004 年 3 月 10 日